

助動詞として avoir を選択する非対格動詞

井口, 容子

<https://doi.org/10.15017/8768>

出版情報 : Stella. 21, pp.71-86, 2002-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



助動詞として avoir を選択する非対格動詞

井 口 容 子

1. はじめに

「割る-割れる」「焼く-焼ける」のように、「他動詞の目的語が自動詞の主語にあたる」という形で、自他が対応する動詞を「転換動詞 *verbe à renversement*」と呼ぶ。フランス語において転換動詞の自動詞形は、*se briser*, *s'allumer* のように、再帰代名詞をともなったいわゆる「代名動詞形」で実現されるものと、*fondre*, *brûler* のような非再帰形の自動詞として実現されるものの2つがある。

ROTHEMBERG (1974) は、フランス語の自動詞の再帰形 / 非再帰形という2つの実現形態は、事象 (event) が外的原因によって引き起こされるのか、それとも内在的な原因によって起こるものなのかという相違を反映するものであるとする。ZRIBI-HERTZ (1987) は、この内的原因 / 外的原因という相違に加えて、動詞の語彙的アスペクトにおける完了 / 未完了という特性が関与しているものと主張する。

フランス語の転換動詞のさまざまな事例を検討した場合、この2つの要因が自動詞の実現形態の決定に関与しているというのは、事実のレベルにおいて説得的であるように思われる。筆者は井口 (1995) においてさらに考察をすすめて、これら2つの要因が動詞の「非対格性」に深くかかわるものであるという見解を示した。すなわち、事象を引き起こす原因が外的なものである、なおかつ語彙的アスペクトとして完了的であるという、再帰形自動詞にみられる2つの特性は、動詞の非対格性を決定する上で重要な要因とみなしうるものなのである。非再帰形自動詞として実現される *fondre* 等の動詞は、プロトタイプの非対格動詞に比すれば「非対格性」が若干低いといえる。そしてこのことはこれらの動詞が完了の助動詞として *avoir* を選択することともけっして無関係ではないのである。

本稿における考察も、基本的にはこの立場に立っている。具体的には、助動詞として *avoir* を選択する「非対格動詞」の代表的存在ともいえる *brûler* にまず注目し、その意味構造についてさまざまな角度から考察する。次に DOWTY (1979) が「程度到達動詞 degree achievement verb」と呼ぶ一連の動詞との関連においてこの動詞を位置づけ、さらには *fondre*, *sécher* 等にかんしても論じていく。

2. *brûler*——非対格的性格と非能格的性格を併せ持つ動詞——

brûler は状態変化を含意する動詞であり、自他の用法を持つという点において非対格動詞の特性を呈する。また LEGENDRE (1989) が指摘するように、*Ce tas de papier est facile à faire brûler* (p.101) にみられるような *faire* を伴う形での「目的語上昇 Object Raising」を許容したり、*Une fois les lettres brûlées, la jeune femme soupira* (p.133) のような過去分詞の構文を許容するなど、統語的にも非対格動詞としての特性を示す。

だが *brûler* の自動詞用法は非再帰形であり、完了の助動詞としても *avoir* を選択する。さらに語彙的アスペクトの面においても、完了的な意味の用例のみならず、未完了的な解釈をもつ用例も存在し、非能格動詞的な性格も併せ持っているといえる。次の (1) は完了の意味、(2) は未完了の意味を持つ用法である。

(1) *Toute la forêt a brûlé en deux jours.*

(2) *La forêt a brûlé pendant deux jours.*

本節においては *brûler* の意味構造及び非対格性を、他言語において同様の意味を表す動詞とも比較・対照しながら考察していく。

2.1. *burn* の両義性

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) は、英語および現代ヘブライ語における、*brûler* に相当する意味を表す動詞にかんして、次のような興味深い指摘を行なっている。英語の動詞 *burn* には、‘consume by fire’ と、‘blaze; emit heat or light’ という2つの意味があり、使役交替を起こすのは前者の意味における場合のみであるというのである。

(3) a. *The leaves burned.*

b. The gardener burned the leaves.

(4) a. The fire burned.

b. *The campers burned the fire.

(以上, LEVIN & RAPPAPORT HOVAV 1995)

いっぽう現代ヘブライ語においては、この2つの意味それぞれに対応して、異なる動詞が用いられているという。‘consume by fire’の意味を表すのは *saraf* であり、この動詞は ‘leave’ や ‘paper’ 等を意味する名詞を叙述 (predicate) するために用いられる。これに対して、‘flame’ や ‘candle’ を意味する名詞を叙述するために用いられるのは、‘blaze; emit heat or light’ を意味する動詞の *ba’ar* であるというのである (LEVIN & RAPPAPORT HOVAV 1995: 101)。

2.2. 非対格性

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) が指摘する *burn* の両義性は、この動詞の非対格性にかかわる重要なものであるといえる。

(3a) における *burn* およびヘブライ語の *saraf* は、状態変化を表す自動詞であり、語彙的アスペクトの点からいうと完了的である。また、(3b) のような対応する他動詞文が存在するという事実が示すように、外的な原因によって引き起こされる可能性の高い事態であるといえることができる。このような特性は、これらが非対格動詞であることを示唆する。

これに対して、(4a) の用法における *burn* およびヘブライ語の *ba’ar* は、未完了的な意味を持つ。さらに出来事を引き起こす原因が内的なものであるのか、それとも外的なものであるのかという、非対格性を左右するもうひとつの重要な要因にかんしては次のように考えることができる。未完了的な意味を表す場合の *burn* は、「状態変化動詞」というよりむしろ、LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) のいう、「放射動詞 verb of emission」に近いものと思われる。「放射動詞」は音声、におい、そして光などの放射を表す動詞で、音声レベルにおいては *buzz*, *clang*, *ring* 等の動詞、においにかんしては *reek*, *smell* 等、そして光にかんしては *flash*, *glitter*, *shine* 等の動詞が例としてあげられる。これらの動詞によって表される出来事 (event) は、外的な原因によって引き起こされるのではなく、主語である名詞句の指示対象に内在する何らかの特性に

よって生じると考えられる。したがって内的な原因によって起こる事象であるということになり、この点において *speak* や *play* 等の動作主を主語としてとる動詞と共通するものであるとみなせる。これらの動詞と並んで、*glitter*, *clang* 等の放射動詞は「非能格動詞」として分類されることになるのである (LEVIN & RAPPAPORT HOVAV 1995: 91-93)。

(4a) の用法の *burn* が意味的に放射動詞に近いものであるのならば、内的原因によって起こる出来事を記述する動詞ということになる。このことは未完了的であるというアスペクト的な特性とともに、この用法の *burn* がむしろ非能格動詞に近い性質を持つことを示唆する。

2.3. 使役交替のパターン——通言語的考察——

さらに通言語的な観点からとらえた動詞の自他対応の問題にかんしても、*brûler* および同様の意味を表す他言語の動詞は興味深い特性を示す。NED-JALKOV (1969)¹⁾, HASPELMATH (1993) は、「使役交替 Causative Alternation」における形態的派生の方向性のパターンを通言語的に研究した文献であるが、次のような興味深い指摘を行なっている。すなわち *burn* に相当する意味を表す動詞は、*break* や *laugh* 等の意味を表す動詞に比べて、使役交替のパターンの通言語的な相違が大きいのである。*break* における使役交替においては、他動詞形がより基本的な形態をとり、自動詞形がそれから派生されたものであるという、「反使役化 anticausative」のパターンをとる言語の割合が高い。他方、*laugh* を意味する動詞は、自動詞形態が基本で他動詞はそれから派生された形態をとる、「使役化 causative」のパターンをとる言語が圧倒的に多い。これらの両極に対して *burn* を意味する動詞の使役交替は、言語によって「使役化」、「反使役化」のばらつきが大きいというのである。

HASPELMATH (1993) は、使役交替において、形態的な派生の方向性が意味的な派生の方向性に対応するという、HAIMAN (1980) 等のいう「図像性の原則 principle of iconicity」が成り立っているものと考ええる。日常的な経験において、外的な原因によって引き起こされる頻度が高いと感じられる事象は、言語的な使役交替においても他動詞形をより基本的な形態とするものが多く、反対に自然発生的に生じると感じられることの多い事象の方は、自動詞形を基本とするものが多いのである。

この事象を引き起こす原因が外的なものであるかそれとも内的なものであるかという相違は、LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) が非対格性を決定する重要な要因のひとつとみなしているものである。*break*, *laugh* の、使役交替のパターンにおける通言語的なゆれが少ないということは、これらの概念を表す動詞の非対格 / 非能格のステイタスが言語間ではほぼ一定していることを示している。自動詞用法の *break* は典型的な非対格動詞, *laugh* は典型的な非能格動詞ということができる。

それでは *burn* の場合はどうだろうか。LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) は、2.1. 節でみたこの動詞における両義性を考慮すれば、NEDJALKOV (1969) や HASPELMATH (1993) の指摘する、使役交替のパターンにおける通言語的のヴァリエーションは容易に説明可能であるという (LEVIN & RAPPAPORT HOVAV 1995: 101)。当該の言語において、‘consume by fire’ という意味と、‘blaze; emit heat or light’ という意味のどちらが前面に出てくるかということが、使役交替の形態的なパターンに反映されるのである。前者の場合は他動詞形、後者の場合は自動詞形をより基本的な形態とする派生の傾向がみとめられるものと思われる。

そして「非対格性」という観点からみると、‘consume by fire’ という意味が前面に出てくる場合、この語は問題なく非対格動詞とみなしうるだろう。これに対して ‘blaze; emit heat or light’ の意味の方が前面に出る場合は、非対格性は低くなり、むしろ非能格動詞に近づくのである。

2.4. *brûler* の場合

フランス語の *brûler* の場合はどうだろうか。*Trésor de la langue française*, tome 14 によると、自動詞用法の *brûler* の意味として、«Être en état de combustion pour être détruit ou éventuellement pour produire chaleur ou lumière» (p.1024) という記述がある。この前半の «pour être détruit» の部分が LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) のいう ‘consume by fire’, 後半の «pour produire chaleur ou lumière» の部分が ‘blaze; emit heat or light’ の意味にそれぞれ対応するものであるといえるだろう。先にみた例文 (1) [(5) として再録] は前者の意味の典型的な例文であるといえる。
(5) Toute la forêt a brûlé en deux jours. [(1)]

また、後者の意味を持つ場合の例文としては、次の（６）があげられる。

（６）Le feu brûlait dans la cheminée. (『ロワイヤル仏和中辞典』)

例文（２）〔（７）として再録〕の場合はまだ少し複雑である。

（７）La forêt a brûlé pendant deux jours. [=（２）]

この文の主語は *La forêt* であり、炎によって破壊される対象である。ただ ‘blaze; emit heat or light’ の意味も強く感じられる。熱や光を放出する主体は、厳密には「炎」であろうから、「森」を主語としたこの文は、メトニミー的にこの意味を表していることになる。この文における *brûler* は、行為・出来事の「結果」ではなく、「過程」に焦点を当てた意味を有するものであるといえることができる。このため語彙的アスペクトとしては未完的であるといえるのである。

2.5. フランス語の再帰形自動詞と非再帰形自動詞

1節でみたように ROTHEMBERG (1974) は、フランス語の自他対応を示す動詞の自動詞形が再帰形／非再帰形のいずれにおいて実現されるかという決定は、事象を引き起こす原因が外的なものであるのか、それとも内的なものであるのかという、意味的な相違を反映したものである、と主張する。このことは、HASPELMATH (1993) の指摘する通言語的な傾向とぴったり一致するものである。

briser-se briser, *allumer-s'allumer* 等の、いわゆる「再帰形自動詞」——というよりむしろ、「中相 (middle) 形」と呼ぶべきであろう——をとるタイプの自他対応は、その形態的側面からいって他動詞形を基本とし、自動詞形態はそれから派生されたものとする「反使役化 anticausative」とみなすことができる。いっぽう、*couler*, *rougir* 等にみられる非再帰形の自動詞をとるタイプは、HASPELMATH (1993) が「自他同形 labile alternation」と呼ぶパターンの使役交替である。これは「図像性の原則」の立場からいうと、外的原因により引き起こされる事象に対応する「反使役化」と、内在的原因により自発的に起こる事象に対応する「使役化」の、中間にあたるパターンであるといえることができる。つまり、「反使役化」のパターンをとるものに比べると、相対的に、内的原因によって生じるとみなされる可能性の高い事象であるといえるのである。

本稿で注目する *brúler* も、自動詞形態として非再帰形をとり、「自他同形」の使役交替のパターンを示す。この事実もまた、*brúler* の非対格性が典型的な非対格動詞と比べると相対的に低い、ということを示唆するのである。

ところで、興味深いことに、フランス語と似た状況が現代アイスランド語においてもみとめられる。KEMMER (1993: 146–147) によると、現代アイスランド語においては、外的動作主によって引き起こされる可能性の高い出来事は中相標識 (middle marker) によってマークされることが多いのに対し (ex. *opna-st* ‘open’, *fylla-st* ‘fill’, *loka-st* ‘close’), 外的動作主によらずに生起する出来事の場合には、古いゲルマン系言語の状態変化動詞の標識である *-n-* によってマークされる傾向が強いという (ex. *harðna* ‘harden’, *kolna* ‘cool’, *þorna* ‘dry (out)’, *braðna* ‘melt’, *røðna* ‘redden’).

HASPELMATH (1993) のデータも考えあわせると、中相形が外的原因によって引き起こされる事象の自動詞形態として用いられるということは、かなり一般性をもつことであるといえるだろう。

3. *brúler* の語彙概念構造

2 節においては、*brúler* の意味的な特性を、「非対格性」と関連付けながら分析した。本節ではこの考察に基づき、語彙意味論の立場からこの動詞の意味構造の記述を試みる。

3.1. 使役・起動交替

brúler のような動詞の他動詞、自動詞それぞれの用法は、一般に「使役・起動」の関係とみなされることが多い。他動詞用法は「使役述語 causative predicate」、自動詞用法はそれに対応する「起動述語 inchoative predicate」とみなされるのである。このタイプの使役交替を示す動詞の代表例は、英語の *break* である。使役述語の語彙概念構造は、一般に次のように表される。

(8) [[x ACT]CAUSE[y BECOME<STATE>]]²⁾

break の場合は、最終状態を表す<STATE>の部分が<BROKEN>となり、語彙概念構造は次のように表記される。

(9) *break* (他動詞用法) の語彙概念構造

[[x ACT]CAUSE[y BECOME<BROKEN>]]

使役述語は、(8)の表記から明らかなように、[x ACT]の部分で表される起因事象と[y BECOME<STATE>]の部分で表される結果事象からなる、複雑事象であるといえる。これに対して起動述語は、使役述語の上位事象を取りはずし、下位事象である結果事象のみを取り出した形のものであるといえる。起動述語の語彙概念構造の一般的な表記は次の(10)のようなものとなる。

(10) [y BECOME<STATE>]

また、自動詞用法の *break* の語彙概念構造は、(11)のように表記される。

(11) [y BECOME<BROKEN>]

brûler の自他対応も、これと同様の「使役－起動」の関係と考えるなら、語彙概念構造は(12)のように表されることになる。

(12) a. *brûler* (他動詞用法)

[[x ACT]CAUSE[y BECOME<BRÛLÉ>]]

b. *brûler* (自動詞用法)

[y BECOME<BRÛLÉ>]

だが *brûler* は2節で指摘したような微妙な意味的特性をもっている。(6)にみられるような未完了的な読みをもつ場合の *brûler* は、「最終状態への移行」を含意しないものであるため、BECOMEを用いた(12b)の表記はふさわしくないといえる。また、(6)のもつ ‘blaze; emit heat or light’ の意味も、状態変化の側面のみを記述する(12b)ではでてこない。このように(12b)は、少なくとも未完了的な解釈をもつ場合の自動詞用法の *brûler* の意味記述としては、二重の意味で妥当ではないということになる。

3.2. «BECOME 型」と «MOVE 型»

3.1.節で指摘した2つの問題点のうち、第1の完了／未完了というアスペクトの問題をまず考えてみよう。影山(1996)は、状態変化を表す動詞をBECOME型とMOVE型の2つに分類する、という興味深い提案を行なっている。«MOVE»はJACKENDOFF(1990)の表記における«GO»に相当する意味述語である。JACKENDOFF(1990)/影山(1996)は、次の(13)における *cool* の語彙概念構造は、«BECOME»ではなく«MOVE»(JACKENDOFF 1990の場合は«GO»)を含むものであるとする。

(13) The metal cooled for hours. (JACKENDOFF 1990: 95)

BECOME と MOVE の相違はアスペクトの相違である。BECOME が完了的な状態変化を表す意味述語であるのに対し、MOVE は未完了的な状態変化を表す。(13) の *cool* は、*for hours* という前置詞句を伴っていることが示すように継続的な相をもつものであり、MOVE による表記がふさわしいものであるといえる。

ところで影山 (1996) は日本語の「冷える、温まる」などは英語とは異なり、MOVE 型ではなくて BECOME 型であるという。

(14) a. * 金属が数時間冷えた。

b. * スープが 2, 3 分だけ温まった。(影山 1996: 61)

「数時間冷え続けた」という意味で、(14a) の日本語の文を用いることはできない。他方、これらの文の継続的時間表現を、「10 分で」のような時間限定の表現に取り替えて、「スープが 10 分で温まった」のようにすれば問題なく受け入れられる、と影山 (1996) は指摘する。このことは日本語の「冷える、温まる」が英語の場合とは異なり、完了的な意味しか表さないことを示すものであり、興味深い。

英語の *cool* は、厳密には MOVE 型と BECOME 型の両方の用法をもつというべきであろう。TENNY (1994) は、ABUSCH (1986)³⁾に従い、*cool* には delimited situation (完了的) を記述する場合と、non-delimited situation (未完了的) を記述する場合の両方があることを指摘している (TENNY 1994: 33)。次の (15a) が前者、(15b) が後者の例である⁴⁾。

(15) a. The weather has finally cooled.

b. The weather has cooled considerably. (以上、ABUSCH 1986)

cool は、*widen*, *harden* 等とともに、DOWTY (1979) が「程度到達動詞 degree achievement verb」と呼ぶものである。この「程度到達動詞」は、フランス語の動詞の自他の問題を論ずる上でも、非常に興味深い動詞クラスといえるものである。このクラスにかんしては、4 節において詳述する。

3.3. «ACT» の可能性

brûler にもだろう。未完了的な意味を表す場合の *brûler* の語彙概念構造は、MOVE を用いて表すことも可能であろう。この表記は (2) [(16) として再々録] のような例文における *brûler* の意味構造を表すものとして、かなり有効な

ものであると思われる。

(16) La forêt a brûlé pendant deux jours. [= (2)]

2 日間にわたって徐々に状態変化が進行していくという過程は、(11) の程度到達動詞 *cool* の例と共通するものがある。

だが、(6) [(17) として再録] の場合はどうだろうか。

(17) Le feu brûlait dans la cheminée. [= (6)]

これは LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) が指摘するこの動詞の 2 つの意味のうち、‘blaze; emit heat or light’ の意味をもつ場合の典型的な例である (本稿 2.1. 節参照)。この例は本稿 3.1. 節で指摘した第 2 番目の問題点とかかわってくるものである。この用法において意味の中心となり、焦点を当てられているのは「状態変化」ではなく、それに到る「過程」なのである。

このように考えると、この用法の *brûler* は、「移動動詞 verb of motion」のひとつの下位クラスをなす「移動様態動詞 verb of manner of motion」に、ある意味において近いということができる。英語の *roll*, *walk*, *swim*, *bounce* 等の動詞がこのクラスに当たるが、LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) は、これらは「移動の方向 direction of motion」ではなく「移動の様態 manner of motion」を表すものであるとして *arrive*, *come*, *go*, *rise*, *fall* 等の「本質的に方向付けられた移動を表す動詞 verb of inherently directed motion」から区別している (pp. 147-148)。つまり *arrive*, *fall* 等においては、「移動」すなわち空間的位置における「変化」及びその「結果」が意味の中心となっているのに対し、*roll*, *walk* 等はそれに到る「過程」が意味の前面に出ており、位置変化はそれに附随して含意されるものにすぎない。

他方において、2.2. 節でも指摘したように、(17) [= (6)] のような用法における *brûler* は、非能格動詞である *shine*, *glitter* 等の放射動詞 (verb of emission) に意味的に近いものがあるといえる。影山 (1996) は、*shine* の概念構造は、*work* や *talk* 等の非能格動詞とともに、意味述語の «ACT» を用いて記述されるべきものであるとする (pp. 68-69)。「動作主性」あるいは「意図性」よりも、「継続活動」というアспект特性と結び付けて ACT という意味述語をとらえる、という影山 (1996) の姿勢は支持すべきものであると思われる。そうであるならば、(17) [= (6)] のような、未完了的な意味をもつ場合の *brûler* の概念構造も、ACT を用いて記述されるという可能性が出てくる。ACT によ

る記述は、「変化」よりもそれに到る「過程」に意味の焦点がおかれるという、この用法の *brûler* の特性を適切に表すことができるものであるといえる。

このように *brûler* の語彙概念構造を、どの意味述語を用いて記述するかという点にかんしては、いくつかの可能性があるように思われる。今後の課題としてさらに検討を続けていきたい。

4. 程度到達動詞と非対格性

3.2. 節では影山 (1996) のいう「MOVE 型の状態変化動詞」を論じたが、このタイプの動詞の典型的なものは英語の *cool* 等の、いわゆる「程度到達動詞 degree achievement verb」であった。このタイプの動詞は、フランス語においても興味深いクラスをなすといえるものであり、また本稿 2 節・3 節で論じてきた動詞 *brûler* とも密接な関係をもつものであると思われるので、ここでしばらく考察してみたい。

「程度到達動詞」にかんしては、ABUSCH (1986) において詳細な分析がなされているが、TENNY (1994) や LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) においても注目されており、語彙意味論の研究にあって重要な意味を持つ動詞クラスであるといえる。特に LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) においては、意味的な構造と統語的な構造を結び付ける 4 つの「リンキング規則」が提案されているが、このうちのひとつを動機づける重要な役割を果たしている。

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) が提案するのは、«Immediate Cause Linking Rule», «Directed Change Linking Rule», «Existence Linking Rule», «Default Linking Rule» の 4 つであるが、これらは一項述語に限って言えば、非対格／非能格のステイタスを決定する規則であるともいえるものである。このうち 2 番目の «Directed Change Linking Rule» であるが、この規則は、「動詞によって記述される、方向付けられた変化 (directed change) を受ける対象に相当する項は、その動詞の直接内項 (direct internal argument) である」(LEVIN & RAPPAPORT HOVAV 1995: 146) というものである。ここにみられる「方向付けられた変化」という概念は、語彙的アスペクトとの関連が強いものであるといえる。最終状態や空間的な到達点に向う「方向付けられた変化」を表す動詞の大部分のものは、アスペクト的には「完了動詞」であるからである。LEVIN & RAPPAPORT HOVAV も、運動動詞

(verb of motion) を分析した 1992 年発表の論文の段階では、まだ «directed change» という概念は用いておらず、アスペクト的な面に注目している。だが 1995 年の著書 *Unaccusativity* においては、あえて «telicity» というアスペクト的な概念に基づいてではなく、«directed change» という概念に基づいてこの規則は定められている。この理由を LEVIN & RAPPAPORT HOVAV は次のように説明する。すなわち、「方向付けられた変化」を表す動詞には、少数ではあるがアスペクト的に atelic なものも存在し、これらが統語的に非対格動詞としてふるまう。このため、非対格性を決定するリンクング規則を、アスペクト的な概念に基づいて規定するのは問題があるというのである。このような性格を持つ動詞クラスは 2 つある。そのうちのひとつが *descend, rise, fall* 等の «atelic verb of inherently directed motion» であり、そしてもうひとつが本稿において注目している「程度到達動詞」なのである (p.172)。

この 2 つの動詞クラスのうち、«atelic verb of inherently directed motion» の方は、たしかに LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) の指摘が当を得ているといえる。これらはフランス語でいえば、*descendre, tomber* 等、いずれも *être* を完了の助動詞として選択する自動詞にあたる。これらは自他交替を起こさないタイプの「非対格動詞」として、そのステイタスが確立しているといってよいものである。

だが「程度到達動詞」の方はどうだろうか。フランス語においては、程度到達動詞は必ずしも典型的な非対格動詞としてのふるまいを示すとは言い難いところがある。フランス語の程度到達動詞には、少なくとも温度変化を対象とするものにかんしては、*chauffer, refroidir* 等、再帰代名詞を伴わないタイプの自動詞形を持つものが多い。これらの自動詞は、完了の助動詞として *avoir* を選択する。2.5 節でみたように HASPELMATH (1993) の使役交替の分類によれば、この「自他同形」のパターンは、再帰代名詞をともなうパターンがそれにあたる「反使役化 anticausative」と、「使役化 causative」の中間に位置するパターンであるということができる。

さらにフランス語の程度到達動詞にかんしては、次のような興味深い事実が観察される。内藤陽哉氏によれば、飲み物や食べ物などをあたためたり、あるいは冷蔵庫で冷やすといった場合、インフォーマントは *chauffer du lait / refroidir le melon* といった他動詞形を用いた構文ではなく、*faire chauffer du*

lait / mettre le melon à refroidir といった自動詞を用いた使役的迂言形を好むという（私信）。これは、これらの程度到達動詞が、「自他同形」の使役交替のパターンを形態的に有しながら、迂言法という手段をかりて「使役化」のパターンをも併有し、状況（situation）によってはそちらの方がより優勢なパターンとなっていることを示している。このことは、HASPELMATH (1993) のいう使役交替における「図像性 iconicity」の観点からいえば、これらの動詞によって表される事象が「内的原因」によって起こる可能性の高いものとしてとらえられていることを示すものである。

このように、フランス語の程度到達動詞は、「未完了性」のみならず、「原因の内在性」という点においても典型的な非対格動詞からは逸脱している。このことはこれらの動詞の自動詞形が、完了の助動詞として *avoir* を選択する事実とも無縁ではないと思われる。

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) の「リンクング規則」にもどると、程度到達動詞の非対格動詞としてのステイタスの不安定さを考えるならば、必ずしも「未完了性」というアスペクト的特性を破棄して「方向付けられた変化」という概念に変更する必要はないのではないか、と思われてくる。ただ、上述したように LEVIN & RAPPAPORT HOVAV がこの変更を行なったもうひとつの動機となっている «atelic verb of inherently directed motion» の方は、非対格としてのステイタスが確立したものである。「リンクング」をどの概念に基づいて行なうかという問題にかんしては、さらに検討する余地があるものと思われる。

5. 温度変化に伴う状態変化を含意する動詞

fondre, sécher そして 2 節・3 節でみた *brûler* は、自他交替を行ない、*avoir* を助動詞として選択する「非対格動詞」の代表的なものである。この3つの動詞と、前節で分析した *chauffer* 等の程度到達動詞は、「温度変化に伴う状態変化」を含意する動詞であるという点において共通している。このうち程度到達動詞の *chauffer, refroidir* 等が最も基本的なものであり、「変化」は温度の面だけにとどまっている。*fondre* になると温度変化に伴う「固体から液体へ」という変化が意味の前面に出てくる。そして *brûler* が意味するものは、加熱による燃焼である。さらに *sécher* もこの連続線上にあるといえよう。熱によ

る水分の蒸発が乾燥の状態をもたらすことになるからである。

brûler の意味構造および統語的ふるまいにかんしては、2 節・3 節で詳しく検討したが、*fondre* や *sécher* においても同様の傾向がかなりみとめられる。筆者は井口 (1995) において *fondre* にかんして調査を行ない、次のような事実を指摘した。*fondre* は、この形態において「とかす」という他動詞的意味と、「とける」という自動詞的意味の両方を有する。だがインフォーマントに (18) を示したところ、この文に対する容認可能性の評価は一様に低く、このような場合には (19) のような使役構文を用いる、という答えがかえてきた。

(18) ?*La chaleur a fondu la neige.

(19) La chaleur a fait fondre la neige.

このことは、4 節において見た *chauffer*, *refroidir* 等の程度到達動詞に対するインフォーマントの反応を想起させる。*fondre* の場合でも、少なくともその対象が「雪」というような常温でとけるようなものの場合には、「自他同形」のパターンよりも、「内的原因」による事象であることをより明瞭にあらわすことができる、迂言法による「使役化」の自他対応パターンの方が好まれるということができらう。

sécher にかんしては、筆者は井口 (1995) において (20) のような完了的な意味をもつ用法とともに、(21) のような未完了的な意味をもつ用法が存在することを指摘した。

(20) Tout le linge a séché en deux heures.

(21) Des couvertures *séchaient* sur le sol, un cheval plongeait ses pattes dans l'eau, et sur le fleuve des navigateurs déplaçaient de lourdes pirogues taillées dans des troncs d'arbres. (HALÉVY, *L'enfant et l'étoile*, p. 36)

例文 (21) は、*sécher* と日本語の「乾く」のアスペクト的な相違を示すものとしても興味深い。日本語の「乾く」には完了的意味しかないため、「毛布が乾いていた」というと「毛布」は乾いてしまっていることになる。3.2 節においても引用したが、影山 (1996) は日本語の程度到達動詞の「冷える」「温まる」などは英語とは異なり、「MOVE 型」ではなくて「BECOME 型」であり、語彙的アスペクトとしては完了的であると指摘している。影山は、これは日本語が「ナル型言語」⁵⁾と呼ばれることと呼応するものとしているが(影山

1996: 63), 「乾く」にも同様の傾向がみとめられるということになる。

brûler, sécher, fondre は、事象を引き起こす原因の内在性、あるいは語彙的アスペクトとして未完了的な意味を持ち得るという点において、典型的な非対格動詞とは異なるとみなせる。そしてこれらは *chauffer, refroidir* 等の程度到達動詞と共通する特性であるということができるのである。

6. 結 語

以上、*avoir* を完了の助動詞として選択する非対格動詞のうち、「温度変化」にかかわる意味をもつものを中心に分析・検討してきた。これらの考察の結果は、助動詞としての *avoir* の選択は、当該の動詞の非対格性の相対的な低さに対応するという、我々の主張を裏付けるものであろう。今後、対象とする動詞の範囲を広げて、さらに検討を重ねていきたい。

註

- 1) NEDJALKOV, V. P. (1969) にかんしては筆者は未見。本文中の引用は, HASPEL-MATH (1993), LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) による。
- 2) この表記は小野 (2000) による。
- 3) ABUSCH (1986) は筆者は未見。本稿における引用は TENNY (1994) による。
- 4) ABUSCH (1986) は, 「起動動詞 inchoative verb」には ‘become-adjective reading’ と ‘become-adjective-er reading’ の2つの解釈をもつものがあり, ある種の修飾語句 (modifier) を付加することによってこの違いが明白になる, とする。たとえば *has cooled completely / absolutely* という場合の *cool* は前者の読みを持つものであるし, *has cooled a lot / quite a bit* という場合の *cool* は後者の意味を持つものである。
- 5) 池上 (1981) を参照。

参考文献

- ABUSCH, D. (1986): «Verbs of Change, Causation, and Time», Report CSLI-86-50, Center for the Study of Language and Information, Stanford University, Stanford, Calif.
- DOWTY, D. (1979): *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- HAIMAN, J. (1980): «The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation»,

Language 56.

HASPELMATH, M. (1993): «More on the Typology of Inchoative/Causative Verb Alternations», in B. COMRIE & M. POLINSKY (eds), *Causatives and Transitivity*, John Benjamins, Amsterdam.

井口容子 (1995): 「フランス語の再帰／非再帰形自動詞と非対格性」, 『言語文化研究』, 広島大学総合科学部紀要 V.

池上嘉彦 (1981): 『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論——』, 大修館書店.

JACKENDOFF, R. S. (1990): *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.

影山太郎 (1996): 『動詞意味論——言語と認知の接点——』, くろしお出版.

KEMMER, S. (1993): *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

LEGENDRE, G. (1989): «Unaccusativity in French», *Lingua* 79.

LEVIN, B. & M. RAPPAPORT HOVAV (1992): «The Lexical Semantics of Verbs of Motion: The Perspective from Unaccusativity», in I. M. ROCA (ed), *The-matic Structure: Its Role in Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.

LEVIN, B. & M. RAPPAPORT HOVAV (1995): *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.

NEDJALKOV, V. P. (1969): «Nekotorye verojatnostnye universalii v glagol'nom slovoobrazovanii», in I. F. VARDUL' (ed), *Jazykovye universalii i lingvis-tičeskaja tipologija*, Nauka, Moscow.

小野尚之 (2000): 「動詞クラスモデルと自他交替」, 丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』, ひつじ書房.

ROTHEMBERG, M. (1974): *Les Verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, Mouton, La Haye.

TENNY, C. L. (1994): *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.

ZRIBI-HERTZ, A. (1987): «La reflexivité ergative en français moderne», *Le Français Moderne* 55, No 1/2.

《辞書》

Trésor de la langue française, tome 14, Centre National de la Recherche Scientifique, Paris, 1990.

田村毅他著『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社, 1985.

《文学作品からの引用》

HALÉVY, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1987.